

スイカ退緑えそ病について

○タバココナジラミが媒介するウイルス病「**スイカ退緑えそ病**」が令和6年8月に千葉県のスイカで初めて発生の確認がされました。

○「スイカ退緑えそ病」の蔓延防止に向けて、タバココナジラミの防除、被害を受けた株の適正な処分にご協力をお願いします。

○「スイカ退緑えそ病」の発生が疑われる場合は、印旛農業事務所（043-483-1128）までご連絡ください。

1 症状

- ・初期症状として不鮮明な退緑斑紋を生じ、増加・癒合しながら黄化、拡大して斑状の黄化葉となり、症状が進展すると葉脈部分を残して葉の全面が黄化（これらの症状はメロン、キュウリと類似、図1）。
- ・スイカでは葉の黄化に加えて、黄化葉の周縁または葉脈間からえそを生じ（図2）、症状が激しい場合は葉が枯死する。さらに果実の肥大不足、糖度不足等を引き起こす。
- ・熊本県が行った接種試験では、病原ウイルス接種20日後から接種葉より上位の葉に病斑が生じ、生長点方向の葉に進展することが確認されている。



図1 株元からつる先に広がる黄化葉



図2 激しいえそが生じた黄化葉

2 伝染方法

- ・本ウイルス病は、タバココナジラミバイオタイプQ及びバイオタイプBがウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）を媒介（半永続伝搬：ウイルス媒介能力が数時間から数日間持続される）することで伝染する。経卵伝染、汁液伝染、土壌伝染および種子伝染は確認されていない。

3 感染植物

- ・現在までに感染が確認された作物は、キュウリ、メロン、スイカのウリ科。
また、雑草ではオランダミミナグサ及びクワクサで感染が確認されている。
※接種試験ではウリ科、ナス科、アカザ科など広範な植物に感染することが確認されている。

4 防除対策 (1) 今、これからできる対策

①作の終盤までしっかり防除

- ・コナジラミ類に効果の高い薬剤で定期的に防除する。なお薬剤抵抗性発達回避のため同一系統の薬剤の連用は避ける（下記「農薬一覧（1）今、これからできる対策」を参照）。

②蒸しこみの実施

- ・栽培終了時に施設・トンネルを密閉してタバココナジラミを死滅させ、施設・トンネル外への飛散を防止する。

○すいかでコナジラミ類に登録のある農薬一覧（令和6年8月15日現在）

	薬剤系統（IRACコード）	薬品名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	使用回数
(1) 今、これからできる対策	生育期間中に使用できる薬剤	METI剤（21A）	サンマイトフロアブル	散布	収穫3日前まで	2回以内
		ネオニコチノイド系（4A）	バストガード水溶剤		収穫7日前まで	3回以内
		スピノシン系（5）	ディアナSC	収穫前日まで	収穫前日まで	2回以内
		ピリジン、アゾメチン誘導体（9B）	コルト顆粒水和剤			3回以内
		イソオキサゾリン系（30）	グレーシア乳剤			2回以内

(2) 来期に実施すべき対策

①苗からの持ち込みを防ぐ（健全な苗を育苗）

- ・育苗ハウス開口部への防虫ネット（0.4mm以下が望ましい）被覆、黄色粘着シートの利用など成虫の侵入防止と密度低下に努める。
- ・育苗ハウス、本圃周辺の雑草は除去する（播種、定植前から実施）。また育苗ハウス内へはスイカ以外の植物を持ち込まない（特にウリ科は×）。
- ・育苗期からの薬剤防除などにより苗から本圃へのタバココナジラミの持ち込みを防ぐ（下記「農薬一覧（2）来期に実施すべき対策」を参照）。

②生育初期における抜き取りの実施

- ・発病株は伝染源となるため、発見次第直ちに抜き取り、ビニール袋などに入れて枯死するまで密閉処理する。

○すいかでコナジラミ類に登録のある農薬一覧（令和6年8月15日現在）

	薬剤系統（IRACコード）	薬品名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	使用回数
(2) 来期に実施すべき対策	育苗期に使用できる薬剤	ネオニコチノイド系（4A）	バストガード粒剤	株元処理	育苗期	1回
	定植前又は当日に使用できる薬剤	ネオニコチノイド系（4A）	バストガード粒剤	植穴処理 土壌混和	定植時	1回
		ジアミド系（28）	バリマークSC	灌注	育苗期後半～ 定植当日	1回

◎農薬の使用にあたっては、最新の「農薬登録情報」で登録内容を確認するとともに、農薬のラベルに表示された使用基準を遵守してください。